

# The Gaskell Society of Japan

## Newsletter

No. 33 (May 2021)

日本ギヤスケル協会ニューズレター

多比羅真理子先生

——愛らしくて剛直だったひと——

鈴江 璋子

(日本ギヤスケル協会第2代会長、実践女子大学名誉教授)



第5回日本ギヤスケル協会全国大会（1993年10月31日）右から山脇会長、多比羅幹事、鈴江幹事（当時）

1968年実践女子大学日野学舎。2年生対象の英語演習クラスの最前列に、ニコニコと反応の良い学生が座っていた。瞳と額を光らせて、どんな質問にもさっと答えてくれ、クラス全体を弾ませてくれる。その学生の名は伊藤真理子さん。私はその年に実践女子大に着任したばかりだったので、こういう学生の存在はまことに有難かった。やがてある日、非常勤講師の伊藤真理子先生が、結婚して多比羅真理子先生とられたと聞いて、驚くことになる。なんと不思議な苗字。だが、多比羅真理子とってから、真理子さんの能力は急速に開花していった。

日本ギヤスケル協会設立当初から、真理子さんは山脇先生の右腕として活躍されていたのだが、9年目の1997年から、事務局長の重責を担うことになる。会務を隅々まで掌握し、よく気が付く真理子さんは事務局担当に最適だったが、負担も大きかったに違いない。初めての大会を成功させた翌日、学科研究室を訪れて「有難うございました」と言ったまま頭を上げられなかったのは、泣いていらしたからなのだ。これは安堵の涙だったろう。いつも楽しそうに笑っている真理子さんだが、実は芯の強い、勝ち気な完全主義者であること、失敗を怖れるあまりに、表面に出たがらないこと、山脇先生に対しても、時にはお気に入らぬ忠告をする、剛直なところのあるひとだと、もうこの時には分かっていた。私は「内助の功」ではだめよ、もっと自分を前面に出さなければ、と助言したように思う。

多比羅事務局長を悩ませた案件には、お金の問題があった。協会設立当初は資金も人材も豊富だったのだが、海外の著名な学者を講演に招くなどのお披露目行事が続いて、事務局引き継ぎ時の繰越額は40万円にまで下がっていた。多比羅事務局長は支出を切り詰め、自分で会員の研究室を回って会費の未払い分を徴収するなどして、繰越金40万円を死守された。後々の会計担当者も「多比羅先生の40万」と呼んで、この金額を切らないように努力した。私が2代目会長をお引き受けした時は「事務局を続けて頂けるわね？」とお願いして、ぴしゃりと拒まれてしまった。「鈴江先生なら、誰とでもちゃんとおやりになれます」というのが拒絶の理由である。幸い日大法学部の諸坂成利教授が事務局を引き受けてくださったので、この時期には、お金・会場・運営などの心配は全くなかった。

多比羅先生は「ギャスケル展」によって、華々しく 3 代目会長のスタートを切られた。実践英文学会との共催であるために入場者も多く、貴重なヴィクトリア朝のドレスや帽子も展示されて、大成功だった。会長 2 期目に、新入会員がメーリングリストを使って会長・事務局を誹謗するという事態が起こった。SNS いじめのような彼の攻撃は、会長が女性であることへの偏見に起因していた。たしかにブロンテ協会もオースティン協会も、男性の会長を戴いていたから、ギャスケル協会は唯一の例外であったかもしれないが、なんという了見の狭さだろう。

多比羅会長はメーリングリスト停止という剛速球を投げて、事態を収められた。新事務局長を引き受けてくださった市川千恵子先生始め、会長をサポートされた幹事・会員の方々に、多比羅先生は終生、感謝と信頼を寄せていらしたと思う。

ある日渋谷を歩きながら、眞理子さんは中 3 の時の悲劇を話してくれた。「みんなが大好きだった社会科の先生が警察に連れていかれて、私たち 10 人位が、放課後、渋谷警察まで駆けて行って、『せんせいっ！』って叫んだんです。1962 年、学園と中高教職員組合との間に紛争が起こり、書記長が不当な扱いを受けた。双方の和解までには数年を要した。私の着任前のことである。「それは、なかったことになっているようよ」と言うと、眞理子さんは目を見開いて「私たちの目の前で起こったんです」と言った。歴史を書く側の大人たちが忘れてしまったことを、14 歳の少女だった眞理子さんが覚えていることに、私は感動していた。

ギャスケルの『メアリ・バートン』の職工組合に関する記述が、眞理子さんと歩いた日の記憶を甦らせる。眞理子さんが育てた「研究会」は、これからもずっと継続していきたい。

◆◆◆新刊紹介 (2020 年度)◆◆◆ (掲載情報は 2021 年 3 月 15 日までに報告されたものです。)

宇田和子著『ブロンテ姉妹の食生活：生涯、作品、社会をもとに』（開文社出版、2,200 円、2020 年 9 月 16 日）本書は、『読書人』『図書新聞』2 紙に書評掲載された

木村正子（訳）フローレンス・ナイチンゲール（著）『カサンドラ——ヴィクトリア朝の理想的女性像への反逆』（日本看護協会出版会、2,200 円、2021 年 1 月 10 日）

桐山恵子（共著）『幻想と怪奇の英文学 IV——変幻自在編』（春風社、2020 年 8 月 31 日、2,700 円）

Mitsuharu Matsuoka, editor, *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays* (Athena Press, 3,636 yen, 25 December 2020) 学会の共著者：Hiroshi Enomoto, Masayo Hasegawa, Keiko Inokuma, Ryota Kanayama, Akiko Kimura, Keiko Kiriya, Kotaro Murakami, Arisa Nakagoe, Sari Nishigaki, Fumie Tamai, Aya Yatsugi.

## 第 32 回大会レポート

日 時：2020 年 10 月 10 日（土）

場 所：Zoom によるオンライン方式

開会の辞：日本ギャスケル協会会長 大野 龍浩（立正大学教授）

研究発表：

1. 司会 大田 美和（中央大学教授）

「“Bran” ——ウィリアム・ギャスケルによる伝承詩の翻訳」

長浜 麻里子（東京農業大学非常勤講師）

2. 司会 木村 正子（岐阜県立看護大学准教授）

「法廷内から法廷外での戦いへ」

——*Mary Barton* のメアリと *A Dark Night's Work* のエリノアを中心に」

矢野 奈々（早稲田大学非常勤講師）

シンポジウム：「キリスト教で解説する G・エリオットとギヤスケル」

『アダム・ビード』と『ルース』における罪の赦しと執り成しの祈り」

パネリスト：村山 晴穂（元三育学院短期大学教授・元桜美林大学非常勤講師）

「The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life* and *Cranford*: A Quantitative and Qualitative Analysis」

司会・パネリスト：大野 龍浩（立正大学教授）

『アダム・ビード』と『ルース』における罪の赦しと執り成しの祈り」

パネリスト：村山 晴穂（元三育学院短期大学教授・元桜美林大学非常勤講師）

講演：司会：松岡 光治（名古屋大学教授）

「ギヤスケルとチャリティ——産業都市マンチェスターの言語空間」

大石 和欣（東京大学教授）

閉会の辞：日本ギヤスケル協会副会長 松岡 光治（名古屋大学教授）

## 研究発表

### 1. 「“Bran”——ウィリアム・ギヤスケルによる伝承詩の翻訳」

本発表では、1853年10月22日号の *Household Words* に掲載された“Bran”の詩形、あらずじ、テーマを紹介し、実際に詩を読みながら、この詩には伝承譚としてのバラッド的要素が強いこと、エリザベス・ギヤスケルの詩の特徴を指摘することは難しいことなど、まずは所感を述べさせていただいた。事実、1971年アン・ローリィの詳細な調査により、この詩は夫ウィリアムの翻訳詩であると判定され、原典も明示されたが、現在なお、夫婦合作とみなされたり、ウィリアム作とする研究書が混在するのは、エリザベスの詩の研究がほとんど進んでいないことが主な原因であると考えられる。

なお、原典であるブルトン語のバラッド集 *Barzaz-Breiz* について、1865年にトム・テイラーという人物による学術的な英語翻訳書が出版されていることが判ったため、これらとウィリアムの翻訳詩を比較検討したところ、ウィリアムの“Bran”には独自の加筆やスタイルの変更があることがわかった。この加筆・変更は、歴史学・文学・言語学の学者であり、マンチェスターの労働者階級の教育にも熱心であった牧師ウィリアムが、ケルト文化を伝えるバラッドの詩想を一般読者向けに分かりやすく伝えるための工夫であったと思われる。（長浜麻里子）

### 2. 「法廷内から法廷外での戦いへ——*Mary Barton* のメアリと *A Dark Night's Work* のエリノアを中心に」

今回の発表では、裁判場面を取り扱った作品である *Mary Barton* と *A Dark Night's Work* を主に取り上げ、ヒロインの法廷内での戦いから法廷外での戦いへと変化していったその意味について考察した。当時の社会で女性が証言台に立つのは珍しかった中で、メアリは証言台に立ち、私的な内容を公の場で恥をしのんで真実を語った。しかし、彼女の発言は判決を揺るがす直接的な力にはならなかった。一方、エリノアの場合はメアリの言動とは正反対で、彼女は最後まで重要案件を内密にして押し進め、証言台に立たずにコーベット判事からディクソンの赦免状を送らせる事に成功し、実質的な勝訴となった。

メアリとエリノアを通して、法廷内から法廷外での戦いへの移行が意味するものを次のように結論付けた。一つ目に、公平な裁判が行われていない事へのギヤスケルの批判。二つ目は証言台に立つ女性の弱さと「公的領域」に踏み込む当時の女性の限界。三つ目に女性の証言や行動が判決に直接結びついて

欲しいと思うギヤスケルの願望の表れ。最後に、「私的領域」に留まるヴィクトリア朝の女性がその領域外へと進出していく未来願望をギヤスケルが暗示しているのではないかと考えた。(矢野奈々)

### シンポジウム：「キリスト教で解説する G・エリオットとギヤスケル」

人生の諸問題をキリスト教の価値観を土台に説明する傾向が強い両作家。その共通点や相違点を宗教を視点にして考える。

#### 『アダム・ビード』と『ルース』における罪の赦しと執り成しの祈り

『アダム・ビード』は、叔母のエリザベス・エヴァンズ（福音伝道者）が 1802 年にノッティンガムの巡回裁判で死刑の判決を受けたメアリの為に熱心な執り成しの祈りを捧げ、回心へと導き、メアリは天国を確信して亡くなるキリスト教史実に基づく。この実話に感動して、エリオットは、1859 年、孤児のヘティという女性を含めた話に脚色して、この最初の長編小説を著した。原罪を負ったアダム（創世記）になぞらえて題名とした、利己心と愛他性を対比させたこの作品をヴィクトリア女王は絶賛した。他方、『ルース』（1853）では、出産した子を前に罪の告白をするルースが、ベンスン牧師等の支えにより、自他共に執り成しの祈りに支えられ、献身的な生涯を全うする。『ルース』の「結び」では、受難を経て、罪の赦しを得て「衣を小羊の血で洗い、白くした」経験をした者達の天国での様子をベンスン牧師が聖書の黙示録から読み上げる。19 世紀の両作品から、罪を覆う愛アガペーと兄弟愛（フィラデルフィア・黙示録 3 章 12 節）の意味を再考察した。(村山晴徳)

#### 「The Plan of Salvation in *Scenes of Clerical Life and Cranford*: A Quantitative and Qualitative Analysis」

キリスト教関連の単語に着目して両作家の e-texts を量的分析した結果、G・エリオットの使用頻度が有意に高い単語は church/clergyman/repentance/bible/christian/god で、ギヤスケルのそれは repentance/penitence である。テキストを場面に区切り、その場面における人物の登場頻度と場所の移動を調べた「総合年代記」(The Comprehensive Chronology) によって、総単語数が近い *Cranford* と “Janet’s Repentance” を比較すると、キリスト教関連単語が登場するのは前者の場合全頁の 7.5% であるのに比べ、後者では 53% である。このことは、G・エリオットの方が信仰問題をより直裁的に扱う傾向にあることを示唆する。

キリスト教の根本教理の一つ「救いの計画」(God’s Plan of Salvation) ——神には自らの霊の子供である人間を成長させ救うために用意した計画がある——の観点から質的分析を行う。両作品に散見される隣人愛の精神、人物の悔い改め、来世への希望は、「人間は神の子で、生まれながらに神の性質を備えている」という、「救いの計画」の主要思想で説明できる。G・エリオットが信じた「神は、奇跡の中にあるのではなく、人々の温かさの中にある」という宗教 (The Religion of Humanity) も、ともに霊魂の善性を信じる点において、同様である。

こうして、量的分析と質的分析の有機的関連性を指摘せんとした。(大野龍浩)

### 講演：「ギヤスケルとチャリティ——産業都市マンチェスターの言語空間」

大石先生は 2019 年に上梓された『家のイングランド——変貌する社会と建築物の詩学』(名古屋大学出版会) の第 1 章「闇の奥の家」の第 2 節「スラムと中流階級の家対比」の「二つの国民の家」で『メアリ・バートン』、『ルース』、『北と南』を論じられているが、今回の講演では中流階級女性にとって女性の本分とされた家庭領域から大きく逸脱することなく活動領域を公共圏にも拡大できた「チャリティ」の観点から、これらの社会小説を読み直された。充実した講演の内容を短くまとめるのは至難の業だが、

特に印象深かったのは、ユニタリアン信仰で重要な美德である「真実 (truth)」と「仁愛 (benevolence)」に対してギヤスケル小説では「共感 (sympathy)」がより重要である点を実証されたこと、そして、マンチェスターにおける自由（放任）主義に対してユニタリアンの宗教活動としてのチャリティ活動やヴォランティアの実態を踏まえ、それを女性たちが家庭の延長線上で活躍できる「準公共圏」として捉えられたことである。これらの点は、マンチェスターのユニタリアンが中心の *Domestic Mission Society* で秘書を務めていた夫ウィリアムの活動と絡めて論じられたので、非常に興味を引かれた。今回の御発表は長い論文としてまとめられるということなので、じっくりと時間をかけて読める日を楽しみにしている。(松岡 光治)

### 「大会レポート」

第 32 回の大会は、感染症の拡大を受け、オンラインによる開催の運びとなったが、参加者は 47 名と多く、活発な議論が交わされた。

大野龍浩新会長が開会の辞を述べられた後、最初の研究発表である長浜麻里子氏の「“Bran”－ウィリアム・ギヤスケルによる伝承詩の翻訳」が、大田美和氏の司会のもと始まった。長浜氏は、従来ギヤスケル夫妻の作品と考えられていたブルターニュの伝承に題材をとった詩 “Bran” (1853)が、ウィリアム一人の手による可能性があることを、研究史を丹念に辿りながら説明された。

第二発表は、矢野奈々氏による「法廷内から法廷外での戦いへ——*Mary Barton* のメアリと *A Dark Night's Work* のエリノアを中心に」である。司会の木村正子氏による紹介の後、矢野氏は、裁判場面を取り扱った表題の二作品に注目され、法廷外におけるヒロイン描写との違いから、ギヤスケルが法廷批判の立場をとっていると考察された。

この後、シンポジウム「キリスト教で解読する G・エリオットとギヤスケル」では、司会の大会長による紹介の後、村山晴穂氏が「『アダム・ビード』と『ルース』における罪の執り成しの祈り」で、エリオットが、キリスト教の異なる宗派を信仰する家系および家族環境のもと、ヒロインを創造していると述べられ、ギヤスケルの『ルース』との違いを指摘された。続いて大会長が、“*The Plan of Salvation in Scenes of Clerical Life and Cranford: A Quantitative and Qualitative Analysis*”と題し、作品の規模の類似性からエリオットの “*Janet's Repentance*” とギヤスケルの *Cranford* に特に焦点を当て、作品中のキリスト教に関する語の詳細な分析を、データを駆使して行われた。

大会はこの後休憩と総会を挟み、大石和欣先生によるご講演「ギヤスケルとチャリティー産業都市マンチェスターの言語空間」を迎えた。司会の松岡光治副会長による紹介の後、大石先生は、19 世紀にコレラがリバプールで流行した際、貧民街に除染キッチンを立ち上げてチャリティ活動を行った労働者階級の女性を、間接的に支援したエリザベス・ラスボーンは、ギヤスケルと親交があったという導入で、一気に聴衆の心を掴まれた。さらに『メアリ・バートン』にも、マンチェスターのチャリティ活動を行っていた、ユニタリアン中心の家庭伝道協会の会報の反映が見られること、男性の公共圏とは異なる準公共圏の中に、ギヤスケル自身が関与し、チャリティ活動を行っていたというご指摘は、大きな反響を呼んだ。議論は尽きなかったが、大会は松岡副会長の閉会の辞で幕を閉じ、この後懇親会のかわりに情報交換会が行われた。

対面とは異なる環境の中、講演や発表をお引き受けいただき、また、数度に渡る直前の通信テストに快く応じて下さった大石先生をはじめとする登壇者の先生方に、また大会をご準備下さった先生方から御礼申し上げます。(江澤美月)

## 日本ギヤスケル協会役員会報告

### 1. 役員会報告

2020年度役員会（10月7日(水)20時～21時、Zoom）

#### ① 会員動向（芦澤事務局長より）について

10月6日時点での会費納入状況に関し、2019年度未納者2名、2020年度未納者8名にメール連絡にて会費を請求した（詳細は事前配布資料を参照）。会員数は77名

#### ② 会員確保対策について

日本ギヤスケル協会への積極的な勧誘をとることで、今後一丸となって会員数の上昇に努める必要性がある。また、今回のような、会員だけでオンライン大会だと、外部へと広がりやすく、新規参加者を見込めないとの指摘があった。19世紀合同研究会もあるが、どのように日本ギヤスケル協会を周知していくかも今後の課題である。

#### ③ 19世紀合同研究会に関して

シンポジウムのパネリストは、日本ギヤスケル協会からは大野会長が、10月末まで、研究発表者1名選出する。

#### ④ 会則の変更について

事務局移転に伴い、事務局を、〒422-8545 静岡市駿河区池田 1769 静岡英和学院大学短期大学部芦澤久江研究室に置くことが承認された。

#### ⑤ 『ギヤスケル論集』投稿規定の変更について

- ・ 『ギヤスケル論集』投稿規定の「規定」を「規程」に変更することが承認された。
- ・ 書式は *MLA Handbook for Writers of Research Papers* の「最新版」とすることが承認された。
- ・ 原稿は原則として Microsoft Word で作成する。1 ページは 37 字×32 行とする。執筆用テンプレートが協会のホームページにある。

### 事務局報告（2019年度）

#### 2019年度一般会計予算案

収入		(内訳)	支出	
前年度繰越金	483,389		例会費	70,000
年会費	500,000		大会費	70,000
当協会		400,000	印刷費	210,000
英国協会		100,000	通信費	60,000
			事務費	5,000
			アルバイト費	3,000
			(小計)	418,000
			英国協会費	120,000
			研究会補助費	3,000
			書評書籍費	0
			支出合計	541,000
合計	983,389		次年度繰越金	442,389
			合計	983,389

2019年度一般会計決算（2019年4月1日～2020年3月31日）

収入	内訳	支出	
前年度繰越金	483,389	例会費	10,190
年会費	400,000	大会費	71,147
（2019年度）	(345,000)一般	印刷費	195,000
	(5,000)学生		
（過年度）	(50,000)	通信費	38,543
（英国協会年会費）	130,000	事務費	972
学会補助金		(小計)	315,852
関西学院大学	30,000		
実践女子大学	50,000	英国協会	108,174
雑収入		研究会補助費	3,000
講演料寄付	60,000	書評書籍費	0
		支出合計	427,026
		次年度繰越金	726,363
合計	1,153,389		1,153,389

上記の通り相違ありません。

- ・ 日本ギャスケル協会 2019年度事務局長 木村正子 印
- ・ 日本ギャスケル協会 2019年度会計監査 猪熊恵子 印
- ・ 日本ギャスケル協会 2019年度会計監査 早川友里子 印

2020年度日本ギャスケル協会予算案（2020年4月1日～2021年3月31日）

収入		支出	
前年度繰越金	726,363	大会費	100,000
年会費（含 英国）	475,000	印刷費	150,000
		通信費	50,000
		事務費	10,000
		英国協会費	125,000
		研究会費	3,000
		(小計)	438,000
		次年度繰越金	763,363
合計	1,201,363	合計	1,201,363

2021年度大会

日時： 2021年10月9日(土) 13時より

場所： Zoomによるオンライン開催

総合司会： 桐山恵子（同志社大学准教授）

研究発表： 司会 榎本洋（愛知県立大学准教授）

「近く、遠い過去——『クランフォード』の時代設定をめぐって」

発表者：村上幸太郎（宮崎公立大学准教授）

シンポジウム：「エリザベス・ギャスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』再評価」

司会／パネリスト：芦澤久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）

パネリスト：木村正子（岐阜県立看護大学准教授）

杉村藍（岡山県立大学教授）

瀧川宏樹（大阪工業大学特任講師）

講演：司会 閑田朋子（日本大学教授）

（仮題）「*Cranford* の挿絵と Peter Jenkyns の悪戯と

——J. Austen や G. Eliot の小説なども視野に入れて」

講演者：久守和子（フェリス女学院大学名誉教授）

★ 次年度研究発表を募集しております。申し込みは12月末日までに事務局へメールにてお願い致します。

#### ◆◆◆研究会予定◆◆◆

2012年の発足以来、本研究会ではギャスケルの短編・中編小説を読んでまいりましたが、昨年度からは長編小説も取り上げることとなりました。作品、日時につきましては以下の通りです。変更がある場合は、日本ギャスケル協会 HP に掲載いたしますので最新情報をお確かめ下さい。尚、当面の間は Zoom によるオンラインでの開催となっております。皆様のご参加をお持ち申し上げます。

作品：

2021年5月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848)

7月 *Mary Barton: A Tale of Manchester Life* (1848)

9月 *Ruth* (1853)

11月 *Ruth* (1853)

2022年1月 *Ruth* (1853)

3月 *Ruth* (1853)

日時：奇数月 第2日曜日 午後2時～午後4時

会場：Zoom によるオンライン開催

#### 編集後記

今回の編集作業中に、第三代日本ギャスケル協会会長の多比羅眞理子先生がご逝去されました。今号の巻頭に第二代会長の鈴江璋子先生に多比羅先生への追悼文をご執筆頂きました。ギャスケル一筋でご活躍された多比羅先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡大が中々収束せず、2020年度に続き、2021年度の大会もオンライン開催にせざるを得ない状況が続いております。一刻も早く、皆様のお顔を拝見しながら大会が開催できます日を心待ちにしております。

様々な影響から例年よりやや遅い「ニューズレター」の発行となりました。発行にあたり、ご協力下さいました大野会長、松岡副会長、芦澤事務局局長を始め、ご執筆やご助言を下さいました方々に厚く御礼を申し上げます。（遠藤花子）

発行：日本ギャスケル協会  
〒422-8545  
静岡市駿河区池田 1769  
静岡英和学院大学短期大学部  
芦澤久江研究室  
URL: <http://www.gaskell.jp/>  
e-mail: [ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp](mailto:ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp)

発行日：2021年5月末日